

農総試ニュース

第42号

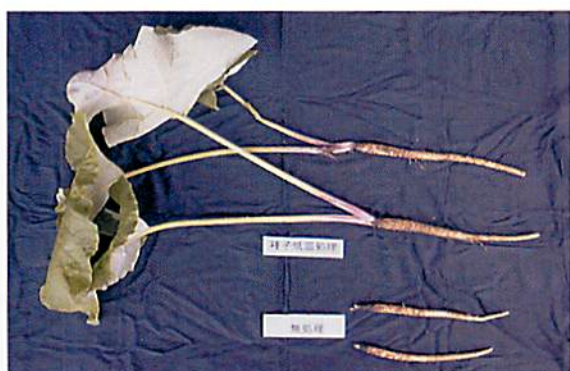
2000.12



新しいタイプのフルーツドレッシング



フジコナカイガラムシの土着天敵
(フジコナカイガラクロバチ)



2～3月どりの若掘りゴボウ



高設栽苗装置を用いた2段階増殖による
効率的なイチゴ苗の生産

主な内容

- 研究の紹介
 - ・かん水管理が容易な高設採苗装置と2段階増殖による効率的なイチゴ苗生産技術の開発
 - ・若掘りゴボウの2～3月どり栽培技術
- 新しい研究の話題
- トピックス
- 新しい取り組み
- 交流行事
- 表彰
- 特許・品種登録

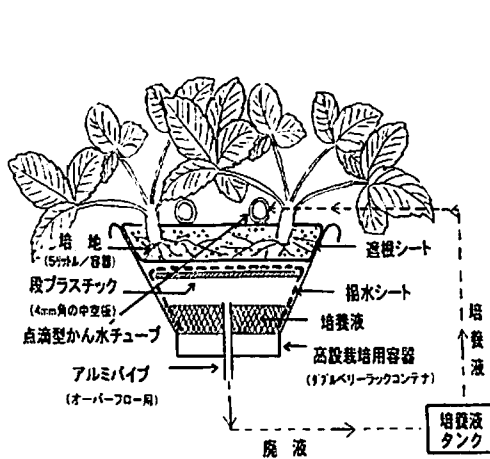
研究の紹介

かん水管理が容易な高設採苗装置と2段階増殖による効率的なイチゴ苗生産技術の開発

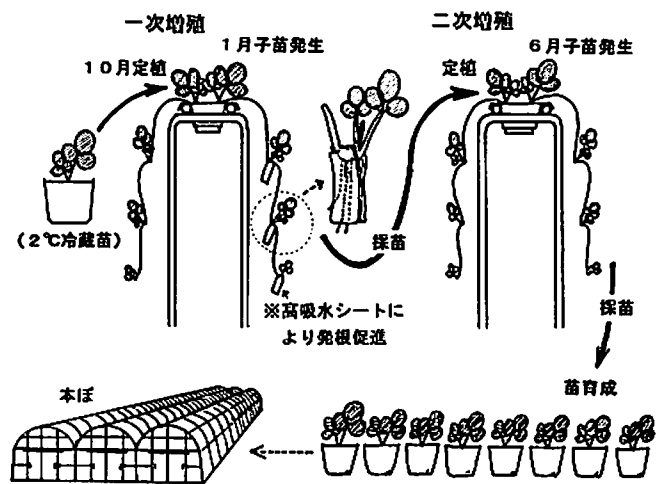
イチゴの高設採苗法は、1.5mほどの高さの台に設置した容器に親株を植え、伸びて下垂したランナーからイチゴ苗を生産する方法で、土耕採苗法と比べ腰を曲げることなく楽な姿勢で苗づくりができることから、一部で普及している。しかし、この方法では、土耕採苗法よりも細やかなかん水管理が必要となるほか、本ほ10アールにつき200株以上の親株が必要であるため、かん水管理の省力化と親株数を大幅に減らすことが可能な生産技術を開発した。

この技術は、高設栽培用の容器「Wベリーラックコンテナ」の内部に湛液部を設けて、揚水シートにより培土の底面から常時給液することで、かん水ムラを少なくできる採苗装置と、それを利用して苗を2段階増殖するもので、①親株を2℃で30日間低温処理して、10月に容器に定植、②1月に発生した子苗の発根を促進するため基部を高吸水シートで包む、③再増殖するために子苗を別の容器に定植という手順で行う。

この方法では、1株の親株から約250株の苗が採れるので、親株は35株程度と大幅に減らすことができる。
(園芸研究所)



採苗装置の概要



イチゴ苗2段階増殖作業の流れ

若掘りゴボウの2～3月どり栽培技術

若々しい葉柄を着けて出荷する若掘りゴボウは、本県のブランド野菜として市場の評価が高い。現在、この作型には、11～12月に収穫する年内どり、4～5月の春どりの2つのタイプがある。さらに1～3月に収穫できる作型を確立すれば高価格が期待され、経営の安定と産地の評価がいつそう向上することが期待できる。

そこで、ゴボウの休眠を打破するために種子に吸水させた後4℃で35日間処理し、10月中旬に播種、2～3月に10アール当たり1,200kg程度収穫できる栽培技術を確立した。

現在、シーダーテープによる機械播種の適応性を検討しているほか、今後はさらに、1～2月どり栽培技術の確立を目指したい。
(豊前分場)

若掘りゴボウの新作型

作 型	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
2～3月どり (新作型)		~~~~~ ○	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————
春どり			○~○	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————
年内どり		○~○	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————	—————

注) ~~~~~ : 種子低温処理、○ : 播種、n—n : トンネル被覆、-/-/- : 収穫

新しい研究の話題

ミレニアムプロジェクト「循環型生活社会を構築するための植物由来揮発性生理活性物質の利用」研究開始

この研究は、科学技術庁のミレニアムプロジェクトの一環で、本年度から3カ年の予定で開始した。スギ、ヒノキ等の間伐材などから抽出した揮発性生理活性物質をサラダナ等施設野菜に施用、根圏土壌における微生物相の変化や作物の生育、収量に対する影響を明らかにして、その利用技術を確認するものである。

これにより、廃棄物の資源化が図られるとともに、土壌環境の保全や健全な作物の安定生産が期待される。
(生産環境研究所)

土着天敵類を利用したカキのフジコナカイガラムシ防除技術開発研究を開始

フジコナカイガラムシは、カキの果実とへたの間に入り込み、薬剤がかかりにくいいため防除が困難である。また、殺虫剤には天敵に対して影響の大きいものがあり、それがフジコナカイガラムシの発生を助長する要因の一つとなっている。そこで、天敵と天敵に影響の少ない薬剤防除との組合せによる総合的害虫管理技術に関する研究を開始した。現在、県内において、新発見の6種を含む8種類の土着の天敵を確認している。総合的害虫管理技術の確立により、農薬をできるだけ使わないカキ生産が可能となることが期待される。

(生産環境研究所)

「ビール大麦被害粒関連DNAマーカーの開発」研究開始

ビール大麦の既存の品種は、日照が少なく雨が多い年などは登熟期間中に穀皮が裂ける側面裂皮粒や穀粒が割れる凸腹粒といった被害粒が発生し、外観品質が低下するなどの問題がある。現在、被害粒が発生しにくい系統の選抜をほ場で行っているが、この方法では多くの労力と時間が必要であるうえに気象等環境による影響を受けやすい。そこで、出芽後約2週間の植物体を使うことで現在よりも検定期間が短く、環境の影響を受けない選抜法を確立するため、ビール大麦の被害粒耐性に関するDNAマーカーの開発に関する研究を開始した。

(農産研究所)

筑後分場における野菜研究の取り組み

筑後地域では、米の大規模な生産調整の実施や米価の下落、イグサ生産量の減少等から野菜などの導入により水田農業の活性化を図ることが重要となっている。そこで、筑後分場では、この4月から野菜の研究に取り組んでいる。現在、この地域で栽培面積が急速に伸びているアスパラガスの高品質安定栽培技術の確立を目指した養分吸収特性に合った施肥法や水分管理法、イチゴの新しい品種、系統の地域適応性、レタス、タマネギの機械化栽培技術確立などの試験研究課題に取り組んでいる。

(筑後分場)

トピックス

新しいタイプのフルーツドレッシングを開発

近年、食べ物が持っている繊維、ビタミン、ポリフェノールなど健康に良い機能性成分が注目されている。当場では、これらを豊富に含む本県の主要な果物であるカキ、イチジク、キウイフルーツを主原料とした新しいタイプのドレッシングを開発した。9月5日にこの製品について記者発表し、現在、アクロス福岡内ファームステーションをはじめスーパーなど7店舗で販売されている。消費者からは、サラダだけでなく肉や魚料理にも合うと好評を得ている。

(生産環境研究所)

ラオス人民共和国首相来場

6月12日にラオス人民共和国のシーサワート首相夫妻一行8名が来場された。同首相は、天敵利用技術や植物バイテクなどの最新の農業技術に強い関心を示された。最後に「たいへん有意義な時間を過ごせた。今後農業技術の交流を深めたい。」との感想を述べられ、場を後にされた。

(管理部)

新しい取り組み

試験中の農業新技術等の実用性を早期に評価

本年度から当場では、農業者の自己責任と経費負担を条件に、開発中の新技術や品種について、先進的農業者に早い段階で実用性を評価してもらうための現地実証試験を行っている。現在、9つの試験を実施しているが、試験研究の期間短縮や効率化、研究成果の速やかな普及にもなることを期待している。

新技術名	実施期間	実施場所
施設栽培ナスの天敵利用による総合的害虫管理技術	12年5月～11月	黒木町
促成栽培トマトにおける総合的病害虫管理技術	12年9月～13年6月	浮羽町
施設栽培シュンギクの総合的害虫管理技術	12年10月～13年5月	北九州市
イチゴにおける天敵を中心とした総合的害虫管理技術	12年10月～13年5月	筑後市
水稲中晩生良食味系統の現地適応性試験	12年4月～11月	山川町
水稲有望系統の現地適応性試験	12年6月～12月	柳川市、朝倉町、大木町
トルコギキョウ吸水種子の低温処理による秋冬出し	12年5月～12月	福岡市
イチゴ新系統現地適応性の実証	12年9月～13年4月	庄内町、田主丸町
		大木町、築城町
若掘りゴボウの吸水低温処理種子による2～3月どり	12年10月～13年3月	久留米市、犀川町

交流行事

ふれあいデー開催

県では、11月を「フクオカ・サイエンスマンス（科学技術創造月間）」とし、青少年をはじめ県民に科学への理解と関心を深めてもらうために数多くのふれあいの場を設けている。その一環として、当場では11月11日にふれあいデーを開催した。当日は、バイオテクノロジーや環境に優しい農業技術など最新の試験研究成果に関する展示をはじめ、フラワーアレンジメント教室や動物とのふれあい広場など多彩なコーナーを設けた。家族連れなど約3,000人の来訪者があり、各コーナーとも盛況であった。

表彰

表彰の種類	受賞期日	テーマ等	氏名	所属
県職員表彰（研究表彰）	12年12月1日	ビール醸造に適した二条大麦新品種の育成とその栽培技術の確立	古庄 雅彦 馬場 孝秀 山口 修	農産研究所 " 農業振興課

特許・品種登録

【特許権取得】

発明の名称	特許年月日・番号	発明者所属・氏名
施設栽培方法及びこれに用いる装置	12年5月12日 特許第 3064927号	園芸研究所 岡部 正昭 " 伏原 肇 (現農政課) " 三井 寿一

【品種登録】

作物・品種名	登録年月日・番号	育成者所属・氏名
いちじく「姫蓬菜」	12年9月5日 第8289号	豊前分場 矢羽田 二郎 (現園芸研究所) 園芸研究所 粟村 光男 (現豊前分場) 豊前分場 正田 耕二 (退職) " 金房 和己 (退職)
水稲「はやつくし」	12年10月4日 第8360号	農産研究所 濱地 勇次 " 今林 惣一郎 (現北九州地域農業改良普及センター) " 大里 久美 (現農政課) " 西山 壽 (退職) " 吉野 稔 (現朝倉地域農業改良普及センター) " 川村 富輝 (現筑後分場)

農総試ニュース No.42

編集・発行 福岡県農業総合試験場

平成 12年 12月 15日

〒818-8549 福岡県筑紫野市大字吉木587

電話 092-924-2936 FAX 092-924-2981

ホームページURL

<http://www.pref.fukuoka.jp/nosei/organ/farc/home3.htm>